昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和六十年六月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十七巻　第六号

（通第四三一号）

目　次

63.9.27

招喚の勅命……近角常観……(1)
二河喩の人生……福島政雄……(7)
願われている私……村上速水……(11)
木村無相師法語……岩崎成章……(16)
生と死の問題……花田正夫……(21)

招喚の勅令

近角常観

法然上人は諸種の行法で助かるに非ず、唯彼本願に順うばかりが助かるべき道であると言われた。選択本願念仏集は十六章に別れてあるが、その第一章は、道綽禅師の安楽集を引いてある。第二章は、善導大師が雑行を捨てて正行即念仏の一行に帰せられた文を引いてある。善導大師が、念仏に帰したのは彼の仏の本願に順ずるのであるから、次に阿弥陀如来余行を以て往生の本願と為さず、唯念仏を以て往生の本願と為すの文と題して、阿弥陀如来四十八願の中の第十八願文を引いてある。この仏の本願に従えば一切の人類、根器に上中下の三種あっても、三輩いずれも念仏の一つで往生を遂ぐべしとて、其次、第四章に大無量寿経三輩、念仏往生の文を引く。第五章は此念仏の功徳の広大なることを示し、第六章は此念仏は末世まで人を救うことを説き、第七章は「この如き優勝の念仏であるから、釈尊もこの念仏をば殊に将来の導師たる弥勒菩薩に附属せられたことを掲げてある。第八章已下は、観無量寿経及び阿弥陀経によって、釈尊の本意も十方諸仏の本意も皆共にこの念仏に在ることを論定して、念仏の一門のみ縦に古今に亘り、横に十方に通じて、人生救済の道であることを示されたが選択集一部である。而も其念仏を云うにも偏に善導一師による。何故なれば大師は直接に阿弥陀仏から念仏を授かったのであるから、独りこの大師に依るのであると云って居られる。ここが信仰問題に於て極めて肝要な点である。此の如く弥陀仏の本願の念仏一つに依る故に、又善導一師に依るとまで云い放って、最も極端に一仏名号の信仰を明快に唱説せられたのが法然上人である。この様にならねば信仰ではない。」たとい仏の恵みが有難いというて居ても、是丈は自分がやらねばならぬ、其他は仏の恵みを仰ぐというのでは未だ絶対の恵みが顕れぬのである。法然上人はこの念仏の為には流罪にまで遭われたが、その流罪に処せられる当時にあっても「われ仮令死刑に行わるとも此念仏は止むべからず」とて、其気色もっとも熾盛であった。これ

けだし人生此南無阿弥陀仏の他なしという信念よりして、身に行い口に述べられたのである。一世の人々は上人の信仰を理解すること能わざる為に、種々上人を苦しめた、苦しめられる度に益々上人は喜ばれた。上人は善導大師の教に従って、南無阿弥陀仏の一心専念の信仰を以て始終せられたのであるが、この上人の教を其通りに受けて、一毫の私意を雑えず、唯御教に従順せられたのが親鸞聖人である。もう一つ云うならば、法然上人の念仏は弥陀の本願である。弥陀の本願は一代仏教の精髄である。法然上人そのままが仏の恵である、仏の喚声であると、かくまでに法然上人をばひとえに信ぜられたが親鸞聖人である。その様に偏に法然上人を信ぜられるには、抑々理由がある。

親鸞聖人は九歳の春出家し給いて種々に修行し、種々に研究して仏道を求められたが、十九歳の時に命終は僅に十年の後であると思われて一層切に求められた。二十九歳の時、いよ〳〵死は眼前に迫って居るが、胸中益々安心がない。三十年来聖道を辿り種々に求められて、而も一も得るところなく、最後に六角堂に参籠しての帰途、聖覚法印に遇い法然上人のことを聞かれ、吉水の禅房に詣で、法然上人の実験を聞いて、立どころに安心せられたのである。この時、法然上人は南無阿弥陀仏、即ち選択本願の念仏が正しく往生の道であると云うの他は無かったに違いない。後の時に及んで、法然上人より自著の『選択本願念仏集』を親鸞聖人に附属せられたときの事実を親鸞聖人自ら『教行信証』の大尾に記して曰く。

元久乙丑歳、恩恕を蒙りて選択を書き、同じき年初夏中旬第四月に、選択本願念仏集の内題の字、並に南無阿弥陀仏、往生之業、念仏為本と、綽空の字とを空の真筆を以て之を書かしめたまいき。

と。この事実を以て推するに、親鸞聖人多年の間、道を求めて得られず、非常に苦しまれて胸中一点の光なき、真に無明の大夜に沈みつゝあったところに、この如来の本願南無阿弥陀仏の広大なる仏陀哀々の慈悲を聞きて、言下に、嗚呼実に如来の本願は有り難いと、心身に徹底して、速に律法主義の諸行、即ち聖道門をすてゝかっきりと念仏の信仰に入られた。其態度が非常に著しく鮮やかであったに違いない。其時法然上人より綽空という名を賜ったのは、このことを証明している。選択集の第一章に引いてある如く、断然聖道門を捨てゝ浄土念仏の一門に帰入せられたる道綽禅師の態度と、法然上人が従来の仏教を捨てゝ念仏一法に就かれた態度と全く一致した信仰なりとの意味よりして、道綽の綽の字と法然上人の諱の源空の空の字とを以て親鸞聖人に名づけられたのである。

かくの如く親鸞聖人は偏に法然上人の教のみが眼中にあ

って、其他は何にも無い。もし律法主義を以て選択集を読むときは、念仏は称えねばならぬということに陥る。念仏をば律法的に取るものは、順彼仏願の文は見れども見えずの風情である。法然上人が力を尽して念仏より外に自己の力は一切駄目であると、明快に念仏の恵を知らしめられた言辞を耳にしながら、法然上人は念仏を唱えて居られる、我々も称える力で助かるのであると思い取ったならば、同時に仏願力が表面に廻って隠れて仕舞う。

念仏して往生するというのと、念仏した力で往生するというのと、僅かの相違であるようだが、その実は非常な相違である。例えば親の命に従って親の恩を喜ぶと、親の命令のままに働くから親が色々と恵んで下さるのだというのとは、まことに幾微の間ではあるが、心に親の恵みを頂いて喜ぶのと、自分の働きから親の恵みをかれこれと計らうとは雲泥の相違である。一筋に仏陀の恩恵を喜んで念仏する実験の味を親しくねんごろに教えられても、自分にこの信仰の実験の味が無ければ、空しく教語の末に拘泥して、律法主義に陥ってしまう。法然上人の一向専修の念仏の教を親しく聞いたものが、矢張美事なる独り立ちの念仏でなくて、なお諸行を捨てかねて、却って念仏に助けさせて居る者のあるのは、皆この信仰の味がないからである。親が道楽をしてはならぬというから道楽をせぬというて居るならば、まだそれは頗る危険である。真に親の恵みが思われると道楽をせぬなどという余地のある云い方でなくて、如何にしても道楽の出来ぬのでなければならぬ。同じように念仏を主にしても、若しそれが真に仏の恵を喜ぶ念仏でないならば、一度捨てた諸行が再び復活して来る。それでは選択本願の念仏ではない。法然上人の念仏は一筋に仏の恵みを喜ぶ選択本願の念仏である。この仏願のまゝの教を全く信じ全く受けられたのが親鸞聖人である。

そも〳〵この人生の上にさしのべて下さる大なる救済が即ち仏である。その仏力をみとめずして、唯仏をたよりたり、念じたりする自分の手元に力の入る念仏ではとても安心が無い。向うからの喚声に順い、向うからの恵みを受るばかりで安心が出来るのである。これであるから聖人は、南無という文字をば仏陀の手元に引き上げて

帰命（南無）とは本願招喚の勅命なり

と云うてしまわれた。親の方から自分の名を名乗って、我をたのめ、我に来れという喚声が、南無の二文字の意味であると、本来の文字の意味を転換して示された点が、信仰問題の要処である。常に云う如く我々が求めるによって得られる信仰ではない。仏の恵みが常に我々に向ってあるが、それが我々の心に入り来って、初めて仏の恵みの広大なことを喜ぶのが信仰である。その信仰の叫びが念仏である。

これによりて念仏は全く如来の招喚に応ずる声である。法然上人の毎日幾万の念仏はこの念仏である。親鸞聖人の、「よき人の教」といわるる念仏はこの念仏である。この念仏は全く本願である、仏陀それ自身である。南無阿弥陀仏である。この南無阿弥陀仏の本願を説くべく十方世界に現われ給うが十方恒河沙数の仏陀で、釈尊もこの十方諸仏中の一つである。釈尊は人生の上に絶対無限の顕れ給うたので、皆南無阿弥陀仏である。法然上人は大勢至菩薩の化身であり、聖徳太子は又観世音菩薩の垂迹であり、悉く皆我我を如来の本願に導くべく現われ給える権化の人である。

人生の上に現われたる総ての教も、一切の善知識も、皆南無阿弥陀仏以外のものなしということになる。教行信証の行巻は一仏の名号を讃歎するのであるが、其処に十方諸仏の名号までを摂めてある。

なお浄土門以外の諸宗の祖師の念仏まで悉く掲げ来ってこれを結ぶに、選択集の「夫れ速に生死を離れんと欲はば二種の勝法の中に、しばらく聖道門をさしおきて選んで浄土門に入れ、浄土門に入らんと欲はば正雑二行の中に、しばらく諸の雑行を抛て、選んで正行に帰すべし、正助二行の中に、なほ助業を傍にして選んで正定を専らにすべし、正定の業とは即これ仏の名を称するなり、称名は必ず往生を得、仏の本願に依るが故に」とある文を以てしてある。

然る所以は、唯一の南無阿弥陀仏、絶対の力の中には何もかも包含して残るところなしという勢である。これ親鸞聖人が法然上人に遇うて喜び給うた南無阿弥陀仏の意義である。

此南無阿弥陀仏は勅命である。よりて聖人は、徳号の慈父と呼んで居られる。而して同じ仏の光を、光明の母といわれた。光明は母なり、名号は父なりと云ういい方である。これは聖人信仰の実験の味である、南無阿弥陀仏の六字は親の名である、親の恵は如何にして知れたかといえば、仏の恵の光が心に届いた時に、父の名の南無阿弥陀仏が届いて、我々に信仰を起さしめた。信仰という子は名号の父、光明の母で生れたのである。

法然上人の説かれた南無阿弥陀仏は七百年前のものでない。現に我々の上に働いて下されてある南無阿弥陀仏である。法然上人は善導大師の疏文を見て、弥陀の本願を発見されたのである。発見して示されたのであって、仏力そのものは千古我々の上に向ってある。その南無阿弥陀仏は永劫の恵である。その南無阿弥陀仏の内容が無ければならぬ。名あれば実あり、実に伴う義がある。名に伴う親の慈悲である。親が子に対して如何にしても捨てぬという願力である。南無阿弥陀仏は慈悲の父母の喚声、義は光明の母の恵である。母の恵が届くと同時に親の名、親の恩が知れて来

る。私は永い間、名号、本願、念仏という名辞は聞いて居ったが、其実の味が分らぬ。半年以上苦しんだ最後、心中に仏の恵の届いた時に、人生に真の大なる恵の親は仏陀なりと信知した。その仏陀は此方から求めて来ったのでなく、我は親なりという親の念力から顕われられた名前である。

私は諸方へ参って親鸞聖人の事を尋ねて、種々の事蹟を聞き、種々のものを見せて貰うが、その中に光明本というのがある。これは盛岡の本誓寺にあります。先ず中央に南無不可思議光仏と大書し、右方の少し下れるところに帰命尽十方無碍光如来と、釈迦牟尼仏の尊像とをあらわし、左の方には之に対せしめて、南無阿弥陀仏と弥陀の尊像とを書し、左辺には下より上に順次に龍樹菩薩、天親菩薩、大勢至菩薩、曇鸞和尚、慈愍三蔵、善導和尚、道綽禅師、少康禅師、法照禅師と図画し、右辺には大勢至菩薩と相対する位置に、聖徳太子を画く。是或は観音菩薩の垂迹を示し給えるならんか。其週辺に太子の眷属とも云うべき五徳博士、阿佐太子、恵慈法師、日羅上人、曽我大臣、妹子大臣を画き、上方には一団欒を作りて、法然上人、釈聖覚、釈親鸞、釈真仏、釈性信、釈是心を画き給えり。而してこの上下二図の中間の少しく右傍に偏するところに源信和尚を画いてある。而して中央の南無不可思議光仏の文字より、大光明を放たして、全大幅を覆うてある。これ十字六字の名号も、釈迦弥陀の二尊も、三朝浄土の大師達も、その他天地法界皆光明中の示現なることを表示せるもので、全く聖人の信念を図画せるものである。聖人の心中に如何に如来の大悲を味われたかがこれで解ると思うて喜んで居った。而して南無不可思議光仏と文字で顕わしてあるから、光明名号の名義揃うてあって不足がないと思うて居った。

然るに本年越中西岩瀬村浄光寺に於て、初めて名号本なるものを拝することを得た。これはまた中央に南無阿弥陀仏と大書し、之を覆うに、天蓋を以てし、之を戴するに宝蓮を以てし、左右に復南無阿弥陀仏を稍小さく重ねて二つ書し、其外方に更に復南無阿弥陀仏を四重に小書してある。これ恐く十二光を表示したのであろう。而して宝蓮の下方に大勢至菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩の形像を図画してある。これは彼の光明本の対であって、この二本を以て光明名号摂化十方の大慈悲を渇仰し給える親鸞聖人の実験の味が、遺憾なく顕わしてあるので、信界父母の図であります。

行巻に、

良に知ぬ徳号の慈父ましまさずば、能生の因闕けなん、光明の慈母ましまさずば所生の縁乖きなん、能所の因縁和合すといへども、信心の業識に非ずば光明土に到ることなし。真実信の業識、これ即ち内因と為す。光明名号の父母、これ即ち外縁と為す。内外因縁和合して報土の

真身を得証す。

と云われてある。仏陀光明の照耀によりて漸くに導かれて信仰の門に入るが、いよ〳〵信仰に入りて後は、また光明の照護によりて信仰動転することなく、始終一貫して極楽無為涅槃界に往生する。恰も子が父母によりて生れ、生れ出ては更にまた父母の愛護によりて生育するが如くである。浅草報恩寺所蔵の聖人直筆の教行信証を拝するに、此光明名号因縁のところに沢山に雌黄を点じて、大いに注意を与えてある。これ実に聖人の実験的信仰の要処であるためである。

末灯鈔にも名号は如来の大善大行にして、之を我等に与え給う約束が本願である。そして其名号と光明とは能所因縁の父母であると示された。「曰く宝号経にのたまはく、弥陀の本願は行に非ず、善に非ず、たゞ仏名をたもつなり。名号はこれ善なり、行なり。行といふは善をするについていふ言葉なり。本願はもとより仏の御約束と心得ぬるには善にあらず行にあらざるなり。かゝるがゆへに他力とはまうすなり、本願の名号は能生する因なり、能生の因といふはすなはちこれ父なり。大悲の光明はこれ所生の縁なり、所生の縁といふはすなはちこれ母なり。」

如　来　　浅原才市

さいちや　ほとけが　みたいなら
こころを　みいよ
機法一体　なむあみだぶつ
これが　さいちが　おやさまよ
ごおんうれしや　なむあみだぶつ

○

ありがたいな
こんな　如来さんは
どこへでも
わしがいくところ
ついてきなさるな
ありがたいな
それが機法一体の　なむあみだぶつ

二河喩の人生

福島政雄

この二河喩の筋は、人あって西の方に向って行こうとする。その里程百千里。だん〳〵行くうちに、何か広々とした寂しい野原にさしかゝった。人影というものは一つもない、寂しい野原を越えて行きますうちに、忽然目の前に二つの河が現われ、その一つは南の方にある火の河、それからもう一つは北の方にある水の河であります。その水の河と火の河との間に、広さ四、五寸と見える狭い道が、東の岸から西の岸まで続いている。西へ行くにはその狭い四、五寸の道を歩いて行かねばなりませんが、その道には水の河から大波が打ちかかっている、火の河から火焔が燃えさかっていて非常に危険に見えるのであります。それでその人は引き返そうかと思って後ろを見ると、群賊どもが襲いかけて来る姿が見える。そこでその河に沿うて右に、或は左に行こうと思いますと、右左から猛獣、毒蛇がやって来る。かくてこの人は絶対絶命におちいって了うのであります。それでどうしてもこの狭い道を行かねばならん、道があるから行けないことはなかろうと決心をすると、東の岸から「お前は決心してこの道を尋ねて行けよ、必ず死の難はないであろう」という励ましの声が聞こえます。その声に次いで、西の岸から呼び声がする「お前は一心に正しい思いをもって、すぐこちらへ来るようにせよ、自分はお前を守ってあげよう」と。

この人は東岸の声に励まされ、西岸の喚び声に頼って、その危ないように見える道を二歩、三歩行きかけますと、後ろの方から優しい声がする。「貴方はどうしてそんな恐しい道を踏み込んで行くのか。我々は決して貴方に害を加える積りはない。引き返しておいでなさい」と。然しその人は見向きもせずに進んで行く。その道が約百歩とありまして、忽ちに西の岸に着き、そこでは善友から喜び迎えられるのであります。

これがこのお喩の大体の筋であります。このお喩について、どういうことを私が感じて参りましたかということを

順々に申して、聖人のお心持を申し上げましょう。

西に向かって

最初に西に向って行く。ところが寂しい野原になる。それが、私どもがまことの道を求めたいと、この人生の行路を辿って行く時に、多くは非常に寂しいことになる。私はどうも感傷的な、センチメンタルなところがありますので、青年時代に寂しいという感じに余程打たれました。

私の二十六才の春三月に求道学舎で近角先生のお話を初めて聞きましたが、そこで、自分は大してえらい心持をもっていた積りであったが、どうもそうでないらしい。自分は非常に温かい心をもって人生を処して行く積りであったのが、そうでないようなというようなことに気がついて参りました。それまでの私は学校の教育に従事して居りましたから、教育愛というようなことを考えまして、教育は愛にありという理想主義を実現出来そうに思うと、大分傲慢な心持でありましたが、先生からひと度この人生は、五分五分の相対の人生である。どうも我々は五分五分根性というものがなか〳〵抜けない、こちらから五分だけ向うをよく思っていると、向うからも五分だけよく思ってくれる。五分だけ悪く思えば、向うからも五分だけ悪く思う。というようなことで、どうも人生は、五分五分根性の人生で、なか〳〵その五分五分根性を抜けられない。そして我々は自分はひとかどの温かい心を持っておるように思っているけれども、少し目を覚まして来ると、自分自身は氷のような冷たい心より外に持っていない。或は炭団玉のような、真っ黒な心しか持ち合わせていない、というようなお話を最初に伺いまして、自分もひとかど立派な心を持っている積りであったが、そういうことなのか、と多少自分を反省しはじめましたが、それから人生というものを寂しいと、痛切に感じるようになりました。それからは友達にも誰にも自分の心を打ち開けることが出来ない、閉じこもったような心持ちになりまして四、五、六月と過しました。六月の末に郷里の熊本に帰って、父親から、結婚問題の相談をうけた時、心の中が親に対して隔て心だらけで居りましたから、その頃父は五十七、八才であったかと思いますが、大分白髪になっておりました。それを二十六才の私が親父の白髪頭を眺めながら、このおやじに自分の心がわかるものかと、そのように考えていまして、折角親から温い心で、相談うけても何一つ答えませんでした。今から考えますとどうも涙が出そうに思うのでありますが、その当時は親に対しても隔て心でありました。そして誰にも自分の心を打ち開ける人がないというような心持ちで、非常に寂しいことでありました。この喩の野原の、誰一人いない寂しい処にさしかゝったというのは、そういうことではあるまいか

と思うのであります。

ところがこの人生は、しばらくの容赦もない、月日はどんどんたって行きます。そうして近角先生の夏季講座を一週間ばかり続けて聞きましたのが七月の初めでありましたが、自分の心中の苦しみの固まりが五つも六つもあるように思ったのが、スッカリとかされたような心持ちになりまして、それから親鸞聖人の歎異抄が、一度にわかるようになったというと、言い過ぎかも知れませんが、つまり弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせてという、あそこのお言葉が身にしみて来るというようになり、それまでついぞお念仏申したこともなく、念仏をどちらかといえば軽蔑しておりましたのが、七月十一日の晩からは、念仏が自然と口に浮んでくる、念仏、称名、自然に湧き出ることになって参りました。今から考えますと、これが回心ということひとたびあるべしと聖人が仰せられたことかと思います。一週間ばかり法悦状態であります。けれどもそういう法悦がいつまでも続くものではありませんで、それから後の私の人生の歩みは、むしろ非常に苦しみの多いものでありました。

三十台には両親をはじめ、大事な友達とか、伯父とか、を続けざまに失い、子供も亡くなりました。どうもその後の私の人生は、むしろ苦しみに満ちているというようなことであります。同時に自分の心の有様、自分の姿がだんだん深刻に見えて参りました。こうなりますと、この二河の喩というものがよそごとでない、自分のことであるとなりまして、後ろから群賊がやって来るというのは、聖人の御解釈によりますと、それはいわゆる聖道といわれる別解、別行、立派な修行を徹底的にやるというような、そういう人々のことである。また悪獣毒虫とは、我々自身の煩悩、四大、五陰、むつかしい言葉で云ってありますけれど、われわれ自身の煩悩の心であると仰っしゃっています。

そして問題は四、五寸の白道というのでありますが、私はじめ、それはいわゆる聖道門の我々のなか〳〵出来ないような正しい道を踏み行なって行く、それを四、五寸の白道と、そう感じていたのでありますけれども、聖人の御解釈を拝見いたしますと、四、五寸というのは、四とは四大の毒蛇、四大とは私共の体と考えていいでしょうが、この体という毒蛇、それから五寸の五とは五陰、言葉はむずかしいのでありますが、私共の精神の苦しみ、迷い、そういうふうに御解釈になっていますが、この度ホッと気がつきまして、そういうものであるか、そうすると自分の身心、これが四、五寸の白道というようなものであるか、そうすると自分の身心、これが四、五寸の白道というようなものである。そして火の河、水の河、これは瞋恚の焔、貪欲の

波、こういうふうに言われてあります。

そうすると、このお喩の全面というものが、私の身心の全体、心と体との全体であると、こうなりますから、近角先生が仰言ったように、喩というものじゃない、我々の人生そのものであると仰言ったことが少し解って来ました。

私はよく二河白道の絵を描かれているのを見たことがありますが、何か狭い四、五寸の道の上を行者が綱渡りでもするように歩いている。そのような絵でありますが、そんなものじゃあるまいという感じが、前からしております。どうもそんなことでなくして、その四、五寸の白道そのものが、自分の体と心なのでありますから、自分自身がもうそこに踏み込んでいるというよりも、自分自身がその白道と火焔であり、その水波である。そういうことになります。

そうすると、東岸に遣わされる声、これは釈尊のみ教えであると言われております。西岸のお呼びかけの声というのは弥陀尊のお呼びかけであると言われてありますが、これがこの貪瞋煩悩、何もかもすっかりお喩のそのお話が自分の体や心の全体である。その釈尊のみ教え、弥陀尊のお呼びかけというものが、自分の腹わたの底の底まで、心の奥の奥まで響いて来る。そうなって参りますから、この御励ましの声、お呼びかけの声で元気づけられて歩んで行く。自分というものの道というものは四、五寸の狭い所を綱渡りするのでなくて、広々とした道を歩いて行くのである。それは私が勝手なことを申し上げるのじゃありませんで、親鸞聖人の教行信証を拝読しますと、その我々の辿って行く道は大般涅槃無上の大道なりとあります。狭い道を危なっかしい足取りで行くのじゃない、広々とした道を一歩一歩進んで行くのである。この聖人の仰せが私に響いて参りまして、なる程有難い。私がはじめて弥陀の誓願不思議に助けられまいらせてということが身にしみて参りまして以来、決して危なっかしい道を綱渡りして行くのじゃない、実際苦しみの中にありながら、燃え立つ瞋恚の焔、荒れ狂う貪欲の波そのものを、自分の体や心から出しておりながら、その発遣の声、招喚のお声が身にしみて参っておりますので、苦しみの中になんとも云えないところの一種の落着きを恵まれて、お念仏の心持ちが私に響いております。

実際ただ今でも私がお念仏申そうと思って称名することは、むしろ少いのでありまして、何かのことに出会って、それから苦しみを通ってボーとしている頃自然と念仏するということになっておりますから、その念仏称名ということが、聖人の仰言る大般涅槃の無上の大道、と私自身は味わせて頂いております。また近角先生の仰言った通りで、この二河のお喩というものが人生そのものである、となって参りますのであります。

359

願われている私

村上速水

一

三月という声を聞くと、何となくほっとした気分になります。それは長い寒い冬の季節が終わって、暖かい春の季節が訪れるからでしょう。そして、まもなくお彼岸がやってまいります。「暑さ寒さも彼岸まで」とは、よく云ったものです。彼岸になると、人々はこぞって、お寺まいりやお墓まいりに出かけます。そして新しい花や、きれいな水を供えて、久しぶりに故人との対話をつづけます。まことに美わしい年中行事といわねばなりません。

しかし、はたしてそれだけですんでしまってよいものでしょうか。かりにそうだとしたら、喜ぶのは故人であって、供養しているあなた自身のためには何の所詮もありません。案じているあなたよりも、むしろ祖先から案じられているあなた方が問題ではないでしょうか。宗教は私自身の問題です。私自身を抜きにしては、何の所詮もありません。私自身の問題としてこそ、彼岸の意味はあると思います。では、彼岸とは、どういう意味があるのでしょうか。

「彼岸」とは「到彼岸」という言葉を略したもので、「彼の岸に到る」という意味です。「彼岸」がある以上、それに対して「此岸」があります。此岸とは現実の世界であり、迷いの世界であります。それに対して彼岸とは仏の世界であり、悟りの世界です。この迷いの世界から、彼の悟りの世界に到るというのが、ほかならぬ到彼岸です。したがって、誰のことでもない、現に迷界にいるこの私が、一歩一歩、理想の世界を目指して進んでゆくのが、彼岸の意味です。

誰かの歌に

今日彼岸　菩提の種子をまく日かな

とあるように、彼岸会の所詮は菩提の種をまくことであり、浄土真宗でいえば往生浄土の道を明らかにしてゆくことこそ、所詮があるというべきでしょう。

二

さて、一体、迷いの世界から悟りの世界にゆくのには、

どうしたらよいのでしょうか。

此岸と彼岸との間には、大きな川が流れています。しかもその川は静かで、おだやかな流れではなくて、滔々として流れている濁流です。経典には暴流と示されています。その川を流れているのは煩悩の濁流です。八万四千の煩悩といわれる無数の煩悩でありますが、つづめていえば、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩悩です。貪欲は、むさぼりの心であり、飽くことを知らぬ心であります。反対に瞋恚は腹立ちの心であり、自分の思うようにならないとき、カッと燃えさかる炎であります。順境にあっては貪欲となり、逆境にあっては瞋恚となる。しかも絶え間なく、ひっきりなく起ってくるこれらの煩悩。

そうした濁流を泳ぎきるには、よほど水泳の達人でなければなりません。その濁流を泳ぎきるには、六度の行が必要であると説かれています。「度」とは「渡る」という意味であって、この川を渡るためには六つの行が必要であります。六度とは、いわゆる布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧の六つの行です。その行を妨げるものこそ、先にのべた三毒の煩悩です。その結論はといえば『教行信証』の中に

一切凡小、一切時の中に、貪愛の心常に能く善心を汚し瞋憎の心常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を

はらふが如くすれども、衆て雑毒雑修の善と名く、亦虚仮諂偽の行と名く、真実の業と名けざるなり。此の虚仮雑毒の善を以て無量光明土に生ぜんと欲するも此れ必ず不可なり。

といわれております。真剣にその道を行こうとすればするほど、彼岸の世界はいよいよ遠く、此岸の世界はいよいよ深いことを知らねばなりません。聖人も「生死の苦海ほとりなしひさしく沈めるわれら」であり、「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定住家ぞかし」と告白せざるをえなかったのであります。「どうにもならない人間」である、といわれたのであります。

三

しかし、そういう罪深いわが身であることを知らせたものは、誰だったのでしょうか。それに気づかれた聖人の先程の悲歎の言葉は、歓喜の言葉にかわったのであります。

「弥陀弘誓の船のみぞ、のせてかならずわたしける」といわれました。

「弥陀弘誓」とは何か、阿弥陀如来の、いかなるものでも必ず救わねばおかぬという本願のことです。

では、本願とは何か。法然上人は次のように云われます。

弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、善く一切を摂せんがために造像起塔等の諸行を以て、往

生の本願となしたまはず、唯、称名念仏の一行をもつて其の本願となしたまへり

阿弥陀仏は、六度の行どころか、いずれの行も及びがたき我身のために、ただ念仏の一行をもって救おうと誓われたのであります。その願いによって出来上った南無阿弥陀仏の名号は、「名号はこれ万徳の所帰なり」といわれ、すべての価値が含まれた行であるといわれます。

名号とは仏の名前であります。しかし、単なる名前ではありません。西洋の言葉に「神は動詞であって名詞ではない」といった人がありますが、南無阿弥陀仏の名号も、動詞であって名詞ではありません。単なる名前ではなくて、呼び声です。『説文』という辞書をひらくと、「名ハ自命ミヅカラナノルナリ。夕ハ昏クシテ相見エズ。故ニ口ヲ以テイフ」と解釈されています。「夕方になると、暗くなって相手が見えにくい。そこで自分の方から名乗るのである」というのです。

たとえば船に乗ると、霧の深いときは汽笛をあげる。また汽車に乗ると、曲り角になると汽笛をあげる。なぜかというと、霧の深いときは周囲のものが見えない。曲り角になると進行方向の向うが見えない。そこで船の方から、汽車の方から名のりをあげて「今、自分が進んでいるぞ、気をつけてくれよ」と、自分の存在を相手に知らせるために、汽笛をあげるのです。それと同じように、南無阿弥陀仏の名号も、自分の存在を衆生に知らせるために、名のっているのです。煩悩に覆われて、仏の姿が見えない私に、「わたしを信じてくれよ」と名のりをあげて呼んで下さるのです。

その呼び声を聞いたとき

○無明長夜の燈炬なり　智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり　罪障おもしとなげかざれ

○願力無窮にましませば　罪業深重もおもからず
仏智無辺にましませば　散乱放逸もすてられず

○如来の作願をたづぬれば　苦悩の有情をすてずして
廻向を首としたまひて　大悲心をば成就せり

と讃仰されたのが親鸞聖人でした。

四

まことに仏の心とは、『観無量寿経』に説かれているように、「仏心とは大慈悲是なり」であります。慈とはいつくしむ心、悲とは悲しむ心です。どんな悪いことをしてもよいと許す心ではありません。許容する心ではなく、不愍で、じっとしておれない心です。『字源』には、「悲は喜の反、痛なり。又有声無涙曰悲と註す」とあります。私はこの解釈をきいて、はじめは怪訝に思いました。「声あって涙なし」とはどんなことか。人間の最も深い悲しみとは、どんなことか。悲しみの極限には涙がないものなのか。

ところがふとした機縁で、それを証明することに出会いました。もう二十年も昔のことです。私の指導していた一人の学生が手紙をよこしてくれました。

卒業論文の提出まぎわでした。

「実は先日、突然私の祖父が心筋硬塞で亡くなりました。しかし虫の知らせというか、その前日、論文を書き上げておりました。ですから論文は間違いなく提出しますが、学校の方は一週間ほど欠席しますからよろしくお願いいたします」

という文面でした。私はとりあえず弔電を打ち、慰めの言葉を送って勇気づけました。その後、まもなくその学生は上京しましたが、私を訪ねてきた学生は、次のような話をして聞かせました。

「先生、私はご承知のように、父よりも祖父に可愛がられて育てられました。ところが、先日祖父の死を知りました。私はそのとき他出しておりましたが、急を聞いていそいで家に帰り、祖父の死骸と対面いたしました。そのとき不思議に涙が出ませんでした。しばらくして我に返ったとき、本堂に行ってワッと思い切り声をあげて泣きました。先生、ほんとうに悲しみの極みは涙が出ないものですね」と。

ほんとうの深い〳〵悲しみは涙も出ないものである。涙が出るのは、それからやっと我にかえってからのことであると、知らされました。と、してみると、自分の家の仏像の目から涙が出ていないのは、涙を流すひまもなくて、じっと見つめている姿であると気づかされました。

五

私は、昭和五十三年正月、突然脳血栓で京都市立病院に入院しました。思いもよらぬことでした。そのショックは精神的にも肉体的にも大きく、早く元気になって、元通りになりたい一心で過しました。それと同時に信仰の問題も人知れず悩みました。その頃、いつ、誰から聞いたか、また誰の書物で覚えたか、「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」という言葉が記憶の中によみがえって、私をとらえて離しませんでした。「そうだ、仏さまの方から願われている私だった」と気づいて、何回か一人で涙を流しました。その後退院してからも、ずっとその言葉の出典を求めさがしましたが、容易に分りませんでした。

たま〳〵花田正夫先生の主宰の『慈光』を読む機会を与えられ、その言葉は池山榮吉先生のものであることが分かりました。そうなると、そのままではじっとして済まされません。池山先生の生涯を知りたいと思い、その事蹟を調べました。先生の著、『意訳歎異抄』『絶対他力と体験』『仏と人』などを貪るように読みました。そしてついに、あの言

葉は二河白道の中の「一心正念直来」の翻訳であったことを知らされました。

そうなると、もっとそれ以上にくわしく先生のことを知りたくなりました。ところが、不思議なものです。私の住んでいるすぐ近くの、京都市右京区の浄住寺に、先生の名号碑があることが分りました。早速、その寺を訪れると、静かな境内に、その名号碑がありました。「南無阿弥陀仏」と刻まれたその裏に「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」の文字が見えました。私は感動しました。あのときの感動を今も忘れることが出来ません。私たちは仏に頼まれていたのでした。仏の方から「どうか救われてくれよ」と頼まれている私、勿体ないと思いました。浅原才市同行も同じように

わたしや
あなたに拝まれて
助かってくれと拝まれて
ご恩うれしや 南無阿弥陀仏

と歌っています。これが他力本願のいわれです。

ですから、彼岸とは、私が祖先供養を通して、案じているつもりの私が、案ぜられている私であり、拝まれ呼ばれている私であることに気づいて、報謝のまことを捧げることが大切であると思います。

——了——

波岡茂輝歌集より

心なくしたる業の悔なくば　至れる人と吾はたたへん

我が霊もかくやあらまほし　大海の水平線に昇る朝日子

和田つみの廣きをのぞみ　大空の高きを仰ぎ　われ岸に立つ

大海に一掬の水そへしごと　わが世に交り生きてありけり

向日葵の陽をしたふごと我がこころ　大いなるものしたひてやまず

葉雞頭の苗は二三寸延びにけり　紅に燃ゆべき　色すでに見ゆ

木村無相師法語

——自覚について——

岩崎成章

（追記）

「宿業の自覚が出来たことは信心をいただいたことである」との先生方のお考えは、一応も二応もそうだと思うのですが、それなら「どれだけその自覚が—宿業の自覚が—毎日の生活で自分の身について、宿業の自覚者らしい考えがうかび、宿業の自覚者らしいことが口に言え、日常の実生活の中で、自分に出来るかと省みると、宿業の自覚がどれほど身についているかと考えると、とても〳〵それはホント—に出来ていない自分である。「無信」「無自覚」のわが身である。ホントーはどこまでいっても、無信、無自覚の自分であると、日々なにかにつけて思いしらせて下さるわが内面のオハタラキこそが、御廻向の御信心であって、無相としては、宿業の自覚が出来るから、宿業の自覚が出来たから、それが御信心をいただいたことであるとは言えない、思えないのであります。むしろ御廻向の真実信心、信心の智慧、智慧の念仏によって、ます〳〵無信、無自覚の自分であるほかはない、ということを思い知らされるばかりであると云う外はないのであります。

今の先生方は、自分の凡夫の「自覚」ばかりやかましく云っていないで、オオモトの如来法蔵さまの、大自覚を自覚させていただくことが大切でないかと思うことです。如来法蔵さまの御自覚、信心の智慧、智慧の念仏に照らされて、私たち愚かな、ナニモワカラン、ナニモ出来ん者も、わが身の宿業がボンヤリなりと思い知らせていただけ、お念仏一つより外ないことを思い知らせていただけることといただいておるのであります。

私は「学問」もなく、宿業の自覚も自分で出来ぬ、無能、無力、愚か者ですから、お念仏一つ、ナムアミダブツさま一つをタヨリにし、タノミにさせていただくばかりです。「宿業の自覚もロクに出来んような自分」「出来ても、身につかんやつ」とお念仏さまにオボロゲに、自覚させていただくだけで、「自覚、自覚」と自分の力で、鬼のクビとった

ように、ヒトさんにいえるような自覚はようしないので、悪衆生、邪見、無信、無自覚の愚かなまんま、助けていただくほかないことです。

ナムアミダブツ　ナムアミダブツのほかはないことです。

無相法語（続）

。一蓮院師、師香樹院師の病床をたずねられたれば、香樹院師の仰せに「誰にも人に尋ねずに、ただ黙って念仏を申しなされ」と。存曰く「さようならば、ただ御不思議におまかせ申して、念仏を称えるばかりで御座いますか」と、師曰く「不思議と言えば、今まで命ながらえたのが、早や不思議じゃほどに」との御言葉でありますが、私もこの年になって師の「誰にも人に尋ねずに、ただ黙って念仏を申しなされ」のおさとしがしみ〴〵ありがたく、また「不思議といえば、今まで命ながらえたのが早や不思議じゃほどに」と云うお言葉がまたなくありがたくいただかれることであります。私聖人の『現世利益和讃』の「南無阿弥陀仏を称うれば、この世の利益きわもなし、流転輪廻の罪消えて、定業中夭のぞこりぬ」を、南無阿弥陀仏とお念仏申していながら、称名の功によって、そのうち流転輪廻の罪を消して下され、定業中夭をのぞいて長生きさせて下さるるということのようにいただいておりました、これから先きのことに思っていましたが、あるときフッと、あっ―そうではなかった、御廻向のお念仏を称えさせていただいて気づかされるのは、これから先きのことでなくて、今日、ただ今の「この生」が、「この命が」今ここにこうして生きて在るということが、すでに早や如来さま、お念仏さまによって定業、中夭をのぞいて下さって、生きさせていただいているのであった、あゝ今、現在のこの命、この生のことであった、と気づかせていただいて、それから『現世利益和讃』の「南無阿弥陀仏を称うれば」のいただき方が、全部、サキのことでなく、今、現在のことであるといただかれるようになったのでありますが、ある日、洛北の金子先生をおたずね申した時、ナニカの話のうちに、右のことを申し上げたら、ああ、その味わい、先日大阪の和行会で話してきたばかりです、と金子先生、大変お喜び下さったことであります。香樹院師の「不思議といえば、今まで命ながらえたのが、早や、不思議じゃほどに」のおさとしに、今日のいのち、早や、如来さま、お念仏さまによって、すでに、定業中夭をのぞかれた命としみじみと、かたじけなくいただかれることであります。

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
命生きて今日六月の空碧き

無　相

3.6.9

無相法語　〝仰せ一つ〟（続き）

私にあっては「仰せ一つ」ということも、「ナムアミダブツ」という仰せ一つ、「ただ念仏」というお念仏の仰せ一つということが、「仰せ」のギリギリなのであります。昭和十年に第一回目の真言寺院時代に、生まれて初めて、声に、口にお念仏申すようになりましたが、それからは、ナニカにつけて、ワケもわからずに称名念仏するようになったのですが、自分としては「称名」ナムアミダブツとはなんだろうか、どういうことだろうか、又お念仏が称えられることは、どういうことだろうかということは、名号、称名については全然無関係だったのであります。昭和十五年十月、フット、静岡市の駅前の街頭を歩いていた時、生死出離ということは、すでに、ここにナムアミダブツと成就されているではないか、と閃くものがあって（年令三十才）それから在家の会社づとめをやめて、「名号のいわれ」「お念仏のいわれ」が聞きたく、真宗聞法に立ち向ったのでした。それは昭和十五年頃のことで、三重県の松原致遠師の寺で、マル二年近く、先生のお念仏中心の御縁にあわせていただきました。その間、香月院師、一蓮院師、カバタの源通寺和上の語録、貞信尼物語等を知るようになったのであります。

しかしお念仏はよく申しましたが、昭和十六、七年の三十六、七才のころは、お念仏が「智慧の念仏」であり、お念仏は「如来の仰せ」であるというようなことは、全然わかりませんでした。しかしそれから二十年経った昭和三十六年ごろ「仰せ」ということに強く心ひかれ関心を持ったようであります。といっても「仰せ一つ」ということがその頃すでに、今ほど、わかるとか喜こばれるといったことのようでもありません。その間「貞信尼物語」や「七里和上言行録」のおさとしによって、念仏とは、ナムアミダブツとは、「汝を助ける」ということをお知らせいただいたのでありますが、それはそうであると覚えただけ、一応わかっただけで、そうである、「ナムアミダブツの名号は、お念仏は、如来の助くる助くるとの仰せであり、お言葉である」と信知されたのではありません。が今は、お念仏とはナムアミダブツとは、如来大悲の切実なる「助ける助ける」「汝の生死出離はこのミダが必ず引き受けて、シマツつけるぞよ」という如来の仰せ、如来、ギリギリのお言葉、「本願招喚の勅命」といただかされていることであります。私なりにでありますが、それで「仰せ一つ」「ナムアミダブツ」という仰せ一つ、「ナムアミダブツ」という如来の仰せ、如来のお言葉一つだけでもう沢山、もう充分である。それを「我が機にもどして安心しよう」とするのではなく、ただ汝を

貞心
寛政十年
（一七九八）
明治五年
（一八七二）
七十五才

助ける」「助くる助くる」というナムアミダブツの仰せ一つで、沢山、充分満足なのであります。「念仏はまことに、浄土に生まるるタネにてやはべるらん、また地獄に堕つべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり」のまんま、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしとの「よき人の仰せ」やがては、「如来の仰せ」「十八願の仰せ」ぎりで、沢山、充分満足なのであります。安心、不安心は如来にまかせて。仰せ一つにまかせて。

ある時、越後の妙改尼曰く『妾は、高台寺で貞信尼さんと居りましたが、その時、貞信さんが「お前さん香樹院様につくと云うがナカナカつけないであらう、ワシに覚えがある」妙改「つけても、つけいでも、ついてみせます」と』ありますが、それについてカバタの和上手記に、ワレ思う、香樹院師につけぬと云うは、第十八願につけぬと云うことで、せめて念仏十遍称えたら助けてやろうともあるなら解りもしようが、絶対の他力ということは、如何にも難信である、よくよく聴聞せねばならぬ。とありますが、この和上の仰せがどうしても、五年、十年経っても、自分の得心のゆくように読み通れなかったので、釈然としなかったのでありますが、「仰せ一つ」「仰せぎり」ということが一応、自分なりにいただかれると、ここのところがやっと自分なりに一応、読み通れるようになった感がするのであります。

それは「信じゃ、念仏じゃ」いうことに（ここでいうと、念仏十遍称えたら助けるというようなこと）にとらわれている間は、どうしても、ここでいう「絶対の他力」ということが読み通れないのでありましたが、「仰せ一つ」「仰せぎり」ということが一応いただかれましたら、「信、行以前」というべき、の「仰せぎり」の中味、「信、行」越えての「信、行」包んでの「信、行以前」というべき、絶対の他力というお言葉が読み通れたのでありました。

かの三河善元寺老師曰く、真実の親に遇うたと云うは、メクラが人に会うたと云うような会いようである。ただ向うより言葉をかけられただけ（如来を）見たのでも、わかったからでもない、お声がかけられたままで遇うたことになったのじゃ、とあり、お助けは、向うから、メクラが声をかけられただけ、ナムアミダブツというお念仏は、如来から、ナムアミダブツ（そのまま救うぞよ）とお声をかけられただけ、お念仏の仰せ一つのホカにお助けはない、信心はない。あんまり念仏一つ、ただ念仏ばかり言っていると、ついつい称えるということにひっかかってしまって行、信のもとの「誓願」「仰せ」を忘れてしまうので、もっとも根本と思う、念仏も信心も、如来大悲の誓願（勅命）仰せ一つがオオモトであるといただくからであります。

〝仰せだけ〟
ひとたび
勅命がかゝった
上からは
勅命だけ
仰せだけ
〝ただ称えよ〟の
仰せだけ
ただ——
ただ——
ナムアミダブツ　合掌
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

3.8.3

釈尊の晩年

中村　元

阿難は釈尊に最後の御説法をお願いした時、

「阿難よ、修行僧らは私に何を待望するのであろうか？私は内外の区別なしに法を説いた。何ものかを弟子に隠すことは無い。私は修行僧の仲間を導くとか、彼等は私に頼っていると思うことがない。

阿難よ、私はもう老い朽ち、老衰し、八十になった。譬えば古ぼけた車が革紐の助けによってやっと動いているようである。

阿難よ、この世で自らを島とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を島とし他によるな」

仏陀は、自分が教団の指導者であるということをみずから否定していられる。たよるべきものは、各々自分自身であり、そしてまた普遍的な法によれと教えられている。これは「親鸞は弟子一人もたず」と仰言ったことにおのずから一致している、それは当然の不思議である。

1818-1883 ロシヤ 父と子

生と死の問題

花田正夫

生死の問題

生あるところ死の黒い影がつきまとうているが、私共は、生のみを重視して、死を軽視または無視している。しかし死の影は時に濃く時に薄く見えるが、消すことは出来ぬ。

ツルゲネフの「老婆」という詩に

「私は一人で、曠野の道を歩いていた。すると不意に、かすかな抜足の音がうしろにする。誰やら後をつけているようだ。振り返ると醜い皺だらけで歯は一本もない老婆がいた。何を話しかけても黙って答えない、気味が悪いので急いで歩くと老婆も急ぎ、止ると足音も止る……。

しかし私は歩み続けた……その時不意に何か知ら暗い穴のような影が行方をふさいだ。〃しまった、墓だ！私の墓場だ！〃のがれられない」

とある。また「明日は、明日こそは」という詩がある。

「暮れ行く一日一日の何と空しく味気なく甲斐ないものに見えることぞ。その残す跡形の何と乏しく、その一刻一刻の何と愚かしく無意味に流れ過ぎたことぞ。でもなお人は生きたいと望む。……あゝ人は、どんな幸福を未来に期待するのであろうか？

一体なぜ人間は来るべき日々に、今しがた暮れたこの日に似ぬものの姿を思い描こうとするのだろうか。

〃明日は、明日こそは！〃と、人は己を慰め、その明日が彼を墓地に送りこむその日までこれを続ける」

ときびしく人生を見つめている。

釈尊は、老・病・死を見て、若き日の誇りをすてゝ、誰一人として逃れられぬ苦悩から解脱の道を求められ、やがて三十五の十二月八日、降魔成道の暁を迎えられたのである。

しかし私共愚鈍な者は、身辺に頻発する無常にありながらも、性こりもなくそれを他人ごととして、明日への幻影を追うて、幻滅の悲哀をくりかえしている。

私の六高時代からの法友の北岡行男兄は、永い年月池山

先生に導かれて歎異鈔を読み続けたが、あとで聞き始めたお父さんは非常な法悦に入られたのに、もう一つというところが解らなかった。これも無常をつきつめないからだと思い歎いていたが、今度の大戦で軍医として従軍させられたとき、今度こそは弾丸雨飛の前に立つのだから死に直面出来るだろうと、それを唯一の望みとして出かけたが、危険な時はビクッとするが、それがすぎるとケロッとしてしまう。幸に無事帰還出来たものの、こんな鈍感な奴は自分では始末がつかない。池山先生は出征中にお亡くなりになっているので、先生追慕の一道会にお参りしたと云って紅葉せず　このまま散るか　散りゆくか

と一句を出して心境を訴えられた。文字通り私共もこの通りで、仰信者の波岡茂輝氏の歌にも、

何といふぐうたらのわれぞ死にのはてまでこのまゝで動かざる気か

と詠じられているのも、愚鈍な私共の極限を吐露していられる。ここにさしのべられた手、よい御縁に恵まれないと浮かぶ瀬はないのである。

親しい者の死

幼い時、私の妹があやまって池におちて死んだ。その死体にふれた時、氷のような冷たさに思わず手をひっこめたが、これが私が生れてはじめて死を知った時である。次に旧制中学の三年の春に二十の兄が急死し、その年の秋に二人の子を残して二十八の姉が亡くなった時、自分も死ぬるんだなあ！と思いはじめた。

さらに岡山医大に入学した四月一日に父が肋膜炎から膿胸となって亡くなった。日々に衰弱し、苦悩する父の枕頭にあって、どうするすべもなく、遂に看護する私が苦しくてたまらなくなって、裏庭に出て、大空を仰いだ時、歎異抄の第四章

「……聖道の慈悲といふは、ものを憐み悲しみはぐくむなり。しかれども思ふがごとくたすけとぐることきはめてありがたし……。今生に、いかにいとほし、不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。云々」

とある聖人の仰せが胸に浮かび、〃親じゃもの、子じゃものどうにかして助けたいだろうが人間の力には限りがある。残念だろう、つらいだろう〃というように心に沁み、お念仏にかえり、それに支えられて最後まで看護することが出来た。

最後に、岡山医大の三回生の頃、同級のS君が病篤いと聞いて病床を見舞うと、

「僕はなあ、医師となって病人の治療に生涯をかけていたのに、こんなに早く駄目になろうとは！」

× 文政年(1818)
明治35年(1902)

と言った時、私をはじめ見舞うた人々が誰も言葉を失って、頭を下げるばかりであった。

愚鈍で無常が無常と思えぬ私に、親しい者が死と病を示して、私自身の無常を知らし、又、人間の力の限界を教えられ、いやが応でも自分自身が沈まぬ船、生死を照らす不滅の灯火を頂かねばならぬと知らされた。

自分自身の無常

別府の眼科医で妙好人と云われた安波勲八氏の述懐に

「不思議な御縁から近角先生や東×陽和上のお育てをうけて、自分のような悪人愚人をどこ〳〵までもお見捨てのない仏様の慈悲を喜ばせて頂く身になったが、自分の死については頭で解っても実感として味えないで長年すごし、そのため東陽和上や篤信の同行にご心配をかけた。

ところがはからずも妹の病がすゝみ、たすからぬとなった時、母と姉から、どうせたすからぬのだから、仏様のお慈悲を話してやっておくれと頼まれた。しかし自分に自信がないので話せないまゝ、死別した。しかしこれが機縁となって、自分の死が問題になって、そのことを信仰座談会で和才誠司さんに訴えたところ〃別に病人にたすからぬと云って驚かさなくても、このしてみようのない奴をお見捨てない仏のましますことを話せばよいではないか。このお見捨てのないお方に導かれて浄土へ帰らせていただけるのだから〃と教えられ、はじめて永年の疑問が解けた。その後間もなく自分が胃ガンで手術不能と九大医学部で診断され、一時はビク〳〵したが、このビクつく奴をかねてからしろしめす大悲にひきもどされ、体力の続く限り診療を続け、縁ある方と仏徳を讃えながらこの世を終らせて頂きます」

とあるが、私自身、二十四の秋、仏心の片鱗に気付かせて頂き、その後長い年月、念仏裡に種々な業縁にふれてきたが、死は自分の問題にならなかった。そうした間に親しい人々の死別にあって、ひとごとではないぞ、ひとごとでないぞとつぶやきながらも空しくすぎ去っていった。

ところが三十五の秋、肺浸潤で二ヶ年間静養したが、それまで自分の健康への慢心を持っていたのが崩れたけれど、何とかして早く治したいと、それに専心した。

次に四十七の時、終戦後、笑いと歌を忘れた同朋と共に仏の慈悲に浴したいと走り廻って、ついに過労がもとで心臓筋肉障害による狭心症の発作をくりかえし、名大病院で手当をうけたが、ヒビの入った茶碗も大切にすれば長持ちする、無理をせずに、一病息災の諺もあるからと云われて、蓬戸不出の生活を続けた。「病上手で死に下手」と人に評せられた。

六十五の時、突然血尿が出たので検診をうけると膀胱腫瘍とのことで、いよ〳〵老病の壁につき当ったが、その入

院中にはじめて自分の死の横顔が見えてきた。そこに孤独と無力の暗い海があるばかりで、人々の親切な声も無力で、自分は艫も舵も失って、嵐の海にただよう孤舟の身と知らされた時、歎異抄の第九章の後半が異様の感動を持って私の胸にくり返された。

「いささか所労のこともあれば死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩悩の所為なり」

ここのところは、病むたびごとに度々うなずかされてきたが、次のお言葉、

「久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこひしからず候こと、まことによく〳〵煩悩の興感に候にこそ。名残り惜しく思へども、娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきこゝろなきものを、ことにあはれみたまふなり。これにつけてこそ、いよ〳〵大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ云々」

一言一句がしみこみ、念仏が口をついてあふれて出た。その念仏の中に「死もまた我なり！」と独語し、自分ながら驚いた。一番いやな、一切が色あせて光を失う死を、我として受けとらして頂けたのも、死様の如何を問わずお見捨てのない大悲大願のたのもしさのお蔭であった。蓮如上人の御歌に、

一人でも行かねばならぬ旅なるを　弥陀にひかれて
行くぞうれしき

も思いあわされて、念仏裡にくちずさんだことである。

其後、七十八の秋、腫瘍が再発し、名大で手当をうけすこし安定してきたが、老化の波はきびしく、すっかり外出を止め、釈尊の最晩年に「ボロ車を革紐で結んで貰ってやっと動いているようだ」と阿難に語られた故実もくりかえして心に去来している。

新潟の篤信者、佐藤強三郎さんが

死に様はよし如何あらむとも凡夫われ　ただ御仏のみ
誓いにまかせて

と詠じられたが、私としては

生かされて生くばかりなりみほとけの　ふかき誓の
あるにまかせて

と申すばかりである。

3.9.9

あとがき

近角先生の「招喚の勅命」は明治末年に信州飯山の修養会で教行信証の講話をされた一部であります。名号のいわれを詳細懇切にお述べ下さったものであります。

福島先生の「二河喩の人生」は、単なる喩ではなく、人生そのものであると仰言ったことがありますが、御自身のお生活に即して讃仰して下さいました。先生は、大信心がひらけることを「久遠の黎明」と讃えられ、信がひらけるとこれでおしまいでなく、むしろ旭日が東から昇るようにいつまでもそれが続き、これから〳〵という味いがはじまると述べられました、深い味いの言葉であります。

村上速水先生は、京都市西京極大門町二一、大門ハイツ六二二に住まれています。大病を機に信味いよ〳〵深く、障り多きに徳多き信徳をそのまま教えられます。

岩崎先生は、木村無相師の往生後、師の法語を掲げて下さり、誌友から感動深いお礼状を頂いております。近角先生が「仏法を聞いて、階段を次々に昇るのでなく、反対に聞けば聞くほど階段を降ろされ、最低辺に立たされて大悲を仰ぐばかりだ」と仰言ったが、無相師の信味はその範を身をもって知らされます。自分には仏法気のものは何もなく、邪見、無信の身とお見抜き下さって、その故に建立して頂いた本願、お呼び声一つと徹底的に述懐されました。

―――○―――○―――

著書紹介

○蓮如上人御一代記聞書讃解　定価五、五〇〇円
　著者・井上　善右衛門

○親鸞教義の誤解と理解　定価一、二〇〇円
　著者・村　上　速　水

以上の発行所　京都市下京区花屋町通西洞院西入
　永田文昌堂

○被差別部落と教育と宗教　定価八〇〇円
　著者・西　元　宗　助
　発行所　柏市光ヶ丘二―一―一
　広池学園出版部

御案内

六月十六日午后一時半、一道会例会催します、御来駕お待ちいたします。講題、歎異抄について。

定価　半年　八〇〇円（送共）
　　一年　一六〇〇円（送共）

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　坂部光雄

発行所　名古屋市南区駅上一丁目十四番地　慈光社
　振替口座　名古屋　六二四七番
　郵便番号　四五七

編集・発行人　名古屋市南区駅上一丁目十四番地　花田正夫
　電話　八二一局七〇三七番

慈光　第三十七巻第六号　昭和六十年六月十五日発行　（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可